紀　行

小児看護アセスメントサテライトトレーニング（NCAST）に参加して

西　村　真実子
（金沢大学医療技術短期大学部看護学科）

はじめに

私は1991年8月5日～8月9日の5日間，アメリカのワシントン大学で行なわれた小児看護アセスメントサテライトトレーニング（Nursing Child Assesment Satellite Trainning，以下NCASTと略す。）に参加する機会を得た。日本から20人の仲間が参加した。セミナーの前に，小さな英国と呼ばれるカナダのビクトリアに船(300人乗りのジェットカタマラン）で観光にいったのだが，荒波でほぼ全員船酔いで，翌日のセミナー初日は最悪の体調だった。しかし，シアトルの美しい景色と自由と大きさを感じさせるキャンパスのなかですごした日々は，とても心地好く，充実したものだった。

NCASTは，小児の発達を中心とした健康管理に関する系統的なアセスメント方法である。サテライトトレーニングと呼ぶのは，当初全米の看護婦にむけて，衛生中継で教育したことがあり，そのネーミングをとったものである。

NCASTに私が興味をもったのは，日本看護協会とワシントン大学継続看護教育部の協同主催で1989年に開かれた親子看護セミナーに参加した時である。このセミナーではNCASTの概要について紹介されたのみであったが，

図1．シアトルの位置

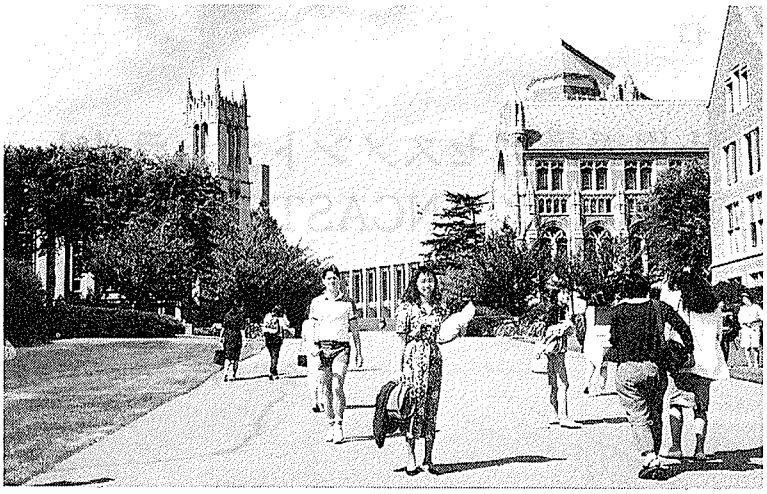

写真１．ワシントン大学の構内で

写真２．NCAST セミナーの参加者と共に

もの言わぬ乳幼児の意志・ニーズを，彼等が身体全体でしめす独特のサインから読みとるという内容は私を惹きつけてやまなかった。しかし，NCAST を学ぶためには，アメリカの家庭を訪問することや乳幼児の微妙な反応を扱うことなどから熟練した英語能力が必要とされ，私には大きな壁となっていた。今回の機会は，そんな中でワシントン大学在籍の押尾祥子先生と日本人の数少ない NCAST 取得者である島本多江さんの尽力のおかげで開催された通訳付きのセミナーであり，私にとって大望の機会であった。

今回は，NCAST の概要とセミナーの内容，及びこれから私が感じた意義などについて紹介させていただく。

１．NCAST について

NCAST は1989年に Dr. Kathryn Barnard（ワシントン大学看護学部教授）によって発表された乳幼児の健康・発達についてのアセ

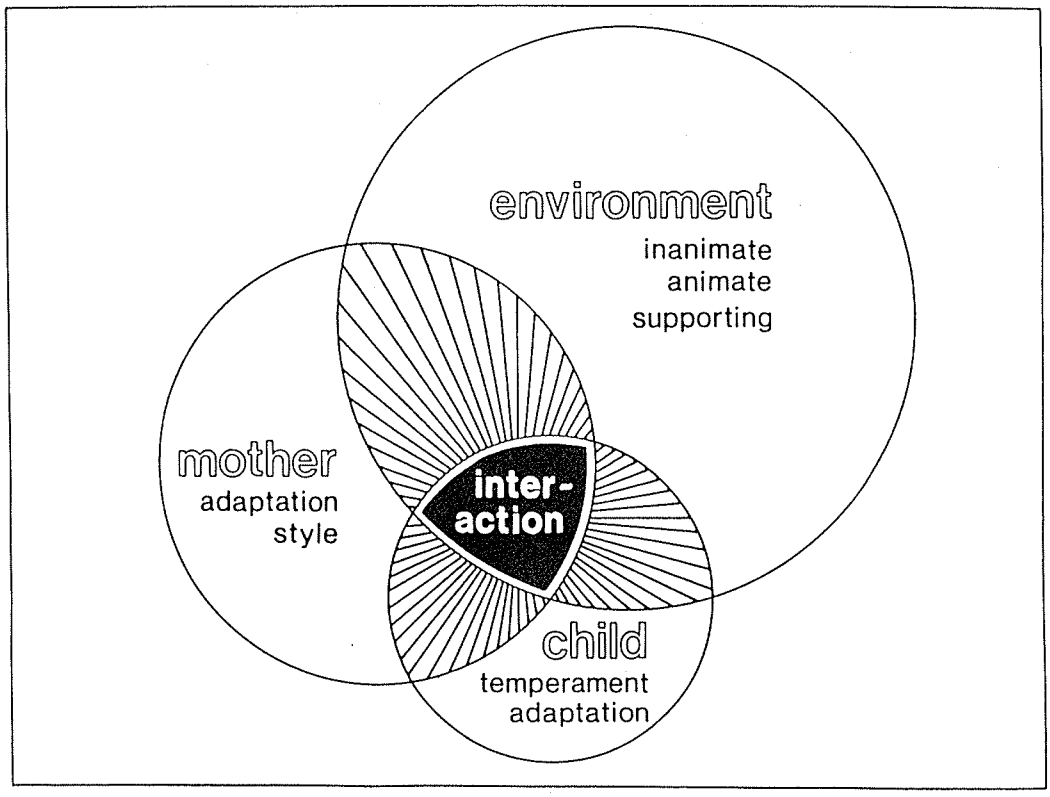

図２．小児の健康アセスメントの相互作用モデル

スメント方法である。すなわち，発達の遅れや問題を早期に予測すると考えられるハイリスク要因（親子の行動と環境，図２）についてのアセスメント方法と，それらの予防のための母子に対する介入・教育について述べられている。内容は，Dr. Barnard を中心とした研究プロジェクトの多くの研究結果とそれ以前の地見を集大成したものである。基本的な概念は，図１のような相互作用モデルによる。すなわち，子どもの健康には養育者（主に母）の特性と子どもの特性と両者をとりまく環境の３つの要素が重要であり，とりわけ３者が重なりあう黒い部分，相互作用が鍵になるという考え方である。もう少し具体的に言うと，子どもの健康状況に影響すると考えられる子ども側の特性には，新生児行動（新生児期にみられる特有の行動であり，これがコミュニケーション上のサインになる），睡眠と授乳のパターン，児の外観，気質（個々の児がもつ生得的な行動パターン），環境・母に対する児の適応能力があり，母側の特性には，母性性，我が子に対する関心，母自身の健康状態，母のストレス，我が子に対する期待，養育スタイル，適応能力があり，環境要因としては，おもちゃなどの物理的な家庭環境，父のかかわりなどの人的な刺激，親の養育に関する成熟度が考えられている。相互作用とは，例えばおもちゃによって子どもがうける刺激はそれを準備する母によって違うだろうし，また，子どもの気質によって子どもに適応していく母の能力も影響をうけるというような３要素が関連している事象を表している。子どもの発達上の問題を早期に発見するためには，これら３要素の状況と３要素が織なす相互作用の状況を注意深くみていくことが重要だという考え方である。

NCASTの内容は，上記のような概念を基に，子ども側の特性として乳児の行動（主にブラゼルトン新生児行動評価の概念を使用），環境要因として子どもの発達に有効な人的・物理的な刺激について考えてあるHOME（家庭観察尺度）について，さらに相互作用の状況として，授乳場面と遊びの場面（課題教授の場面とも言う。）の母子相互作用のアセスメント方法から構成されている。

尚，このコースのサーティフィケーション（学習の確認証）は，アメリカの看護婦の継続教育制度に入れられている。

2．NCASTセミナーについて

セミナーの日程は，表1の通りである。講義は看護学部の講義室などで行なわれた。セミナーの内容は，NCASTの意義・展望，乳児の行動（睡眠／覚醒の状態），親子の交流，授乳中の母子の交流，課題を教える時（遊び場面）の母子の交流の5課に分かれている。事前に「CHILD DEVELOPMENT」というNCASTで準備された本を読んでくることが前提である。それぞれの講義の後には，ビデオをみてのセルフチェックがあり，その課の学習を確認するしくみになっている。

写真3．ワシントン大学看護学部母子看護学講座の先生方

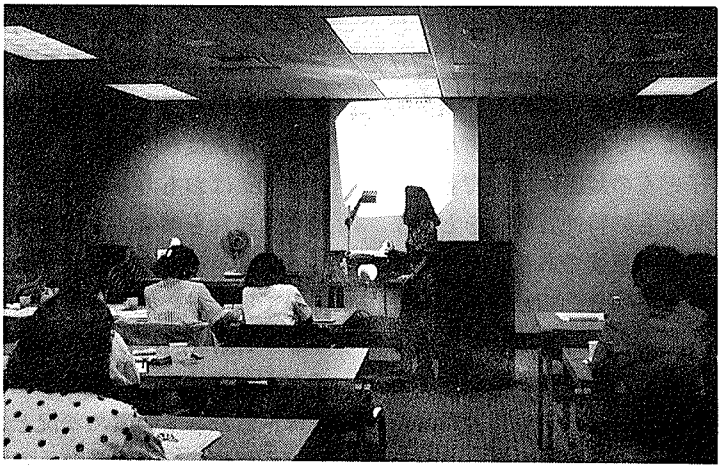

写真4．「NCASTの概念を現場で使うための討論」で発表している私

表1．NCASTセミナーの日程

	A M	P M
8/5 '91	学部長，あるいは継続教育担当副学部長による、歓迎の挨拶 セミナーのオリエンテーション キャスリン・バーナード博士 「なぜNCASTを学んでいただきたいのか」 第一課 NCASTの展望 目標　1.子供の健康管理に系統的スクリーニングと確立されたアセスメントの方法が大切であることを認識する。 2.授乳の場面や課題を教える場面など，日常の親子交流を観察するための基礎を作る。	図書館のオリエンテーション ワシントン大学スザロ図書館 健康科学図書館 ワシントン大学書店 一般部門 医学関係部門
8/16	第二課　乳児の行動と睡眠／覚醒の状態 目標　1．睡眠と覚醒の状態に関する理解を深める。 2．コミュニケーションの手段としての乳児の行動に目を開く。 3．乳児の幅広い行動能力に気づく。	ジョージナ・サムナー，NCAST所長 「アメリカでのNCASTの普及」
8/7	第三課　親と子の交流 目標　1．交流場面の大切さを認識する。 2．世話をする人と乳児との相互性の本質を理解する。 3．乳児の交流技術の発達に応じて，親と子の交流の内容が変わることを理解する。	第四課　授乳中の母子の交流 目標　1．授乳中によく見られる母子の行動に気づき，その大切さを認識する。 2．母子の授乳行動を観察する技術を身につける。 3.授乳中にコミュニケーションと相互適応が起こっていることを知り，ひとつひとつの行動の持つ意味を理解する。 4．1，4，8，12ケ月の月令別に，最も普通に見られる乳児の授乳時の行動を認識する。 5．適応的，非適応的な母親の行動を認識する。 6．子供の交流技術の発達に伴って，授乳行動がどのように変化するかを理解する。
8/8	レベッカ・ケイン博士 「NCASTを用いた研究」 概念を実践に生かし，研究を通して実践を改善した実例午後	第五課　課題を教える時の母子の交流 目標　1．課題を教える時の母親の教え方のタイプを認識する。 2．母親の教え方のタイプと子供の学習との関係を理解する。 3．課題を教える場面で，どのような母子の行動が見られるかを知る。 4.母親が適切なフィードバックを行うことが子供の行動と学習に関係することを理解する。 5．課題を教える場面の母子の行動を観察する技術を習得する。 6．課題を教えることを通して交流が深まる課程を認識する。 7.課題を教える課程を知ることが，子供にとって望ましい環境を整えるのに役立つことを知る。
8/9	小グループでの討論および発表 NCASTの概念を実際に現場で使うための具体策	LDRP家族中心の出産経験のために作られた，新しい産科病棟の概念バラード地域病院見学

写真５．Craven 教授から受講証をうけとる

セミナーは，その他に NCAST の全米への普及の過程についてや，NCAST 概念を生かした実践や研究の紹介，及び現場で使うための具体策についての少グループでの討論・発表，病院見学などが行なわれた。

３．NCAST の臨地応用

私が最も NCAST に惹かれたのは，単なるアセスメントツールではなく，その概念が小児保健や看護などに広く応用ができる点と NCAST を学ぶことによって子どもの種々なサインに対しての感受性が高まる点であった。概念の臨地応用には，母（家族）や医療従事者への教育がある。内容は，環境要因や母子相互作用の重要性のみならず，乳児の能力（サイン）やそれの日常ケアへのいかし方についても含まれる。

この中で画期的なものについて幾つかを紹介したい。一つは，乳児の睡眠／覚醒のパターンから，沐浴やおむつ交換や遊びなどの最も適切なタイミングが判断できるという点である。乳児は一見眠っているか泣いているか哺乳しているかだけのようにみえる。しかし，児の行動を詳細に観察すると，６種類の状態（State）があり，児の24時間はこれらの状態の規則的な繰返しからなっている。児の発達を助けるためには，神経系の成熟にとって重要な睡眠を邪魔せずに，且つ効果的に刺激を与えることが大切であり，ノンレム睡眠（State 1）からレム睡眠（State 2）になってきた頃，新生児期では授乳と授乳の中間よりやや過ぎた頃が適切であるとされている。このように，個々の地の状態（State）の観察を基に適切なケアの時間を決めることができる。

二つ目の臨地応用は，乳児の行動からストレスサインをキャッチし，ケアにいかしていくことである。これは，私にとって最も魅惑的で，感激的であった。この概念は，NBAS（ブラゼルトン新生児行動評価）から出されたものである。すなわち，新生児の発達には音や体を揺らすなどの五感に対する適切な刺激が必要ではあるが，脳脊髄神経系が未発達なために，過度な刺激はストレスとなり，多くのエネルギーを消耗し，疲労につながる。このストレスをうけた時の児の反応をストレスサインとして読みとる。一方，児は成熟するにしたがって，ストレスに対して自分で自分を癒そうとする試みも行なっており，この能力を育てるためには養育者が暫し援助しないでいることも必要である。児がストレスをうける程度や自己癒しの能力は個々によって違う。NCAST には，具体的なストレスサイ

ンや癒し（もしくはなだめ）のケアについても述べられており，これらを参考にし，日常ケア（育児）の中で個々の適切な刺激のレベルをつかみ，遊びの内容や環境調整を行なう。また，同様に個々の自己癒しの能力を把握し，それにあったタイミングで養育者からの援助を行なう。私は，このことについて特に興味があり，NCAST とは別に NBAS について勉強する機会を得たが，学習する前よりも確実に乳児をみる目が変わり，自分の感受性が高まったことを感じている。さらに最近私が感じているのは，NBAS の考え方は健康児や未熟児を対象にして開発されたものではあるが，脳にダメージをうけた児，特に脳炎の回復過程にある児にも適応されるのではないかということである。このように，この概念は広く臨床応用の可能性を秘めていると思わずにはいられないのである。

三つ目の臨地応用としては，子どもの発達にとって有効と言われている家庭環境の人的・物理的な刺激の内容（HOME に記載されている）を，母（家族）への具体的な指導内容としてや，看護婦・保健婦の観察の視点としていかせるのではないかという点である。しかし，HOME はアメリカで生まれたものであり，日本独特の育児観念で育っている子どもたちにとってはどうかが懸念される。私たちは，これについて多少検討をしているが，確かに日本の育児にとっては既に充分になされており，不必要な刺激もあるのではないかと思われる。また逆に，現在の日本の育児の問題点を含む項目の検討も必要であると考える。これらを明確にした後に確実な臨地応用が可能になるのではあるが，HOME の家庭刺激は充分参考になると思われる。

おわりに

アメリカで学んだことをそのまま導入することは難しく，また危険でもある。しかし，未知なるものや問題状況に対して合理的，躍進的にとりくんだ結果は，説得力をもって私に迫ってくる。これらを一面的にとらえることなく，広い視野と判断力をもって，より良い臨床のために，また子どもと家族の健康のために，活用していきたいと感じさせられたセミナーであった。

セミナーの後，サンフランシスコにまわり，太陽溢れる町並みと５つ星の豪華ホテルに泊り（シアトルでは簡単な大学の寮に宿泊していたので，格差が大きかった！），旅を満喫して帰国した。最後に，諸行事などで多忙の中私をこのセミナーに参加さてくださった本短大の諸先生方に感謝し，紀行を終らせていただくこととする。